
大人のための異文童話集 9 ピーターと狼

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人のための異文童話集9 ピーターと狼

【Zコード】

Z0662M

【作者名】

天野久遠

【あらすじ】

とうとう少年は言いました。「ボクはとても寂しいよ。ボクはこうしていつも泣いるんだよ」と。
でも一度心の声を話せば、それ声についていたコトバは狼に喰い尽くされてしまい、やがては…。

「いつも、だれにでも、ボクはいつづつんだ。」

「ボクは…寂しくなんかないよ。」

「ボクは…泣いてなんかないよ。」

そうして夜が来ると、なぜだか田からは熱い汗がこぼれ落ちて来る。そんなときは胸の奥のどこかが壊れてしまって、なぜだか凍えるほどに寒くなっている。

それでもボクはいつづつ。

「ボクは…寂しくなんないよ。」

「ボクは…泣いてなんないよ。」

そして深い闇がやつて来ると、ボクは奥歯をしっかりと歯み締めるんだ。

くぐもる声が外へと洩れないように、両の手をしっかりと握りしめながら。

ボクの顔を見たときだけは、みんながとても心配してくれるから“寂しくなんかないよ、泣いてなんかないよ。”と。

そんなボクのコトバを聞けば、みんなが安心してきっと眠れると頷うんだ。

だからボクは、いつもふざけたよつて笑いながらいつづつんだ。

「ボクは…寂しくなんかないよ。」

「ボクは…泣いてなんかないよ。」

来る日も来る日も、ボクにできる」となんて…それだけだから。

いつも胸の奥が寒くなるのは、寂しいからではないし、目から涙が流れ落ちるのは汗なんだから、決して泣いてなんていない。
だから誰もボクを心配する」とはないんだ。

そんなことを繰り返していた夜、ボクは外を走る影を見た。

いつだつたか、ボクも聞いたことがある、それは宵闇を翔る狼の姿なのだと。

その狼は、寂しがりで泣き虫を連れて行くんだって言っていた。

だけどボクは平氣だ。

寂しくなんてないし、泣いてなんかいないのだから…。

ボクはいつものように、笑顔で応える。

「ボクは…寂しくなんかないよ。」

「ボクは…泣いてなんかないよ。」

そうしてまた、ひとりになると…ボクは膝小僧を抱えて横になる。するとコトバには出来ないほどどの痛みが、ボクのカラダの中を恐ろしいほど速さで駆け巡る。

「みんなどこへ行つてしまつたの?」

「ボク、やつして二つもひとつぱりちなの？」

心の中のボクがそう叫んだ時、アイツがやつてきて一ヤリと笑った。
そしてひとつこと… こういったんだ。

「わあ、我慢しないで言つていいんだ。」

ボクにはその声がとても優しく聞こえて、とうとう言ってしまったんだ。

「ボクは泣いても泣いても泣いてるんだよ」
「ボクは泣いても寂しいよ」
て。

するとアイツは、天にも届くような笑い声をあげたんだ。
ボクにはもう我慢の扉は閉められない。

ボクはとても恐ろしくて「とても寂しいよ。とても悲しいよ。」

何度もそう呟んでみたけれど、その声は消え去るなりソイツに脳裏へされてしまう。

それでも…ボクの声は誰にも聞こえる」とはなかつたんだ。

(後書き)

BGMには敢えてKREVAではなく、SONOMIの“ひとりじ
やないのよ”でも聞いて欲しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0662m/>

大人ための異文童話集9 ピーターと狼

2010年10月9日04時49分発行